

ねがいのいえニュース 第51号

生活支援ハウスねがいのいえ広報紙・2018年7月15日発行

発行責任者：藤本真二 〒331-0071 さいたま市西区高木185-29

Tel (048) 626-1909 Fax (048) 626-1920

E-mail negainoie@r6.dion.ne.jp Hp <http://www.negainoie.com>



文字通り死ぬほど暑い猛暑が続く、災害も各地で発生し、報道に胸を痛める日々ですが、みなさまご無事でしょうか？ねがいのいえは今、数年に一度やって来る、なぜかアクシデントが集中して発生する星回りに入ったようで、毎日いろいろなことが起きています。

なぜかアクシデントが集中する

病気とは無縁と思われていた20代の男性利用者が、5年前突然吐血し2週間の入院生活に付き添ったことがありましたが、先日夕方の移動支援中、ぐったりした様子や諸症状の報告を受け、スタッフにすぐ受診するよう指示しました。案の定、消化管出血と診断され、翌日には吐血がありましたが、緊急入院にも付き添い迅速な対応が功を奏して、とりあえずの難局を乗り越えました。

その翌日には、利用者のお母さんが倒れたので来て欲しいとお父さんから電話があり、駆けつけてみると、熱中症と過呼吸で意識が低下している状態でお父さんが困っているところでした。ビニール袋を口に当てる応急処置で意識を取り戻し、その後水分を取ることが出来たので引き上げてきました。利用者本人の問題ではなくご家族の問題でなぜ私たちに電話が来たのだらうと思っていたら、ご自身がねがいのいえを呼んでくれと訴えたそうです。そんなに信頼を得ているのは有り難いものの、救急車を呼んだほうが安全だったのではと苦笑いしました。

その翌々日、この春に高等部を卒業して就労支援に通所を始めた利用者のご家族から自宅で暴れていると呼ばれ、緊急でショートステイに預かりました。春前後から頻りに起きる家庭での暴力的なパニックに悩まれていましたが、即効性のある解決策がない中、週1回のショートステイを定期化し、また、暴れた時には駆けつけるなど現実の暮らし方を支えながら、一方で家族力や本人の成長を促す根本的な解決を同時進行で図っていく方針を立てました。

行動のコントロール困難度で会員ナンバーワンのかたも、数ヶ月に一度の落ち着かない日々が到来し、ショートスタッフは細心の注意を払ってケアする日が続いています。

全て夜に起きたことで、ねがいのいえが24時間の支援をしていることによって実現できたサポートです。障害のある本人もそのご家族も、大変な日々を薄氷を踏む思いで暮らされています。そのみなさまの困難に対して「営業時間外」と断らないために、24時間年中無休は当たり前のこと。思えばそれは、数年前に全国ネットが提唱した安心コールセンターそのものだと思います。

進化する心のケア

国が推奨する行動障害研修だけでは解決しないと訴え続けて、研修を開催してノウハウを伝え続けてきました。参加される受講者のみなさまからは厚い共感をいただいています。世界の技術を学び続けてきて、私たちのスキルも成長し続けています。

気持ちは体に現れるので、体に入る力と張り合い緊張をほぐして解放することで、心が癒されるという基本に立ったやりとりをこれまでしてきましたが、世界の最先端技術は今や、張合いなどしなくても触れているだけで、誰でもほぐれて癒されると伝えていきます。つまり、何もせず触っているだけでいい、という方法です。

実際には、背中やお腹や頭など、触れる部位によって促される神経系や内分泌系が異なり、医学レベルの奥深い知識と技術が必要ですが、ねがいのいえスタッフは簡潔に説明を受けて取り組んでいます。

体重100キロを超える自閉症のかたが座り込み寝転がったら、次の行動に誘うのがどんなに大変かみなさんご存知でしょう。しかし、数分間肩などに手を置いているだけで、自分から立ち上がってくれる姿を目の当たりにした新人のスタッフが、見よう見まねのタッチセラピーで、学校の先生も他団体の職員も手をこまねく難易度の高い利用者のかたをかんとんに誘導していました。



行動困難ナンバーワンの利用者の体に嵐が宿った時には、どんな方法を駆使しても鎮静は難しく、ショートの夜一晩中、狭い部屋で走り出そうとするのを止めていたこともありましたが、先日の朝方、その状態に陥った体に日々修練しているタッチセラピーを1時間実施したところ、再び布団に戻っていきました。この嵐の状態から鎮静に戻ることができたのは初めての体験で、こちらも驚きと感動を覚えました。おそらく本人も、自己コントロールできた成功体験に喜んだことでしょう。

私たちのメソッドは今も成長し続けています。多くのみなさまと研修を通して共有し一緒に成長したいと望んでいます。

生活介護やじろべえの学習会活動

ねがいのいえの生活介護やじろべえは、ほとんどのかたが言葉の話しえない重度な人が集まっている事業所です。そのような方たちは、大人になっても幼児のように扱われるのが世の中の通例です。しかし今は、東田直樹さんをはじめ複数のかたの発信により、彼らも内面ではちゃんと理解していて、豊かな世界を持っていることがわかっています。だとすれば、わからないように見える人でも年齢にふさわしい学びと情報を提供されなければ、本当に内面まで子どものような大人になってしまうことでしょう。

やじろべえでは1年前から学習会の時間を始めました。世の中の、障害のある人や生きづらさを抱える人たちがどのように生きているかを学んだり、障害のある人が書いた本を朗読などしていません。ふだんじっとしているのが困難な人たちが、真剣な表情で座って聴き入っている姿に、その内容を受けとめ、しっかり向き合っていることを感じます。

決して子ども扱いせず、年齢にふさわしい成長を促し、何十年か経って、障害は不自由だけど幸せな人生だったと書いていただいた時、私たちもいい支援ができたと自分をほめてあげられるのかもしれない。

思いを綴り始めたあつしくん

ねがいのいえスタッフ 多田彩華

以前にも紹介した自閉症の中学生あつしくんの最近の出来事。

放課後デイで書道の活動をしたある日、スタッフと一緒に作品を書いていたあつしくんが、途中から少しずつ気持ちが乱れ始め、頑張って1枚を書き上げたところでついに泣き出した。

何がきっかけで泣いているのか担当していたスタッフに尋ねたところ、昨年新卒で入職したスタッフの伊藤くんを先日噛んでしまったことを、気にしているのではないかとの意見だった。

気持ちが溢れたときにはその場からいったん離れて環境を整えてからやりとりをすることが通例だが、今回は目の前にその伊藤くんがいたため、一緒にその場でやりとりすることにした。

あつしくんと伊藤くんが隣り合わせに座ってもらい、ベテランの多田と細田がお手伝いする形でスタートした。あつしくんも伊藤くんも互いに緊張した面持ちだったが、やがて伊藤くんから話しかけた。

「噛まれた時には痛いとも思ったけど、そのことであつしくんのことを怒ってはいないよ。あつしくんも伝えなかった想いがあったんだと思うし、これから自分もいろいろ勉強して、あつしくんの気持ちが少しでもわかるようになるからね。」

あつしくんの表情が少しずつ和らぎ、やがて笑顔が現れて、その日は家に帰るまで落ち着いて過ごせた。

しかしその翌週は再び不安定な日が続いた。そこでまたスタッフの多田と細田とで個別の時間を持つことになった。

始める前にセッションについての説明はしてあったものの、部屋に入るとややテンションが上がり、筆談を始めてもツバ吐きや高笑いが続き落ち着かない様子だった。数枚書いたところで、筆談を続けることは難しいと感じ、体のやりとりを約30分間行った。

そして筆談を再開する際、「大丈夫？」と尋ねると

『ほそだくんがいてくれるし だいじょうぶです』
と綴った。次に学校について尋ねると

『がっこうのいやなとこ せんせいが がんばらせようとする

こたえたいけど じしんがもてない うんどうかいのときもそうでした

うんどうかいのときおやすみできて すこしあんしんしました

おかあさんにすこしかんしゃです』

と綴った。あとで確認したところ、運動会当日はお母さんの体調不良でお休みをしていた。

次にお母さんの体調について尋ねると、

『まへのほうがげんきのように おもいます



ぼくが いつもこまらせてばかりいるから
おかあさんはかなしそうなかおを しています
ごめんなさいといたいののに てれちゃっていけない
すなおにいえることができればいいのに
いけないのがとてもつらいことです』

と綴った。「そうだね、伝えられたらいいのにね」と声をかけると、

『はい どうすればいいのかしりたい』と綴った。

「細田くんが教えてくれるよ」と伝えると、

『おねがいします ひつだんっておもしろいです いつもありがとうございます』

と綴り、締めくくった。

その後の毎日時折崩れることはあったが、少しずつ穏やかに過ごせる日々が増えていった。それと同時に、お母さんの体調も少しずつ良くなっていった。今回続いた不安定な日々は、若いスタッフを噛んでしまったことがきっかけだったが、そこまで気持ちが追い詰められたのは、お母さんの体調が悪いのを自分のせいだと感じていたからだろう。

昨今、想いを表現する方法を身につけた人たちは、激しい行動がじょじょに減ってゆき落ち着いて暮らせるようになる事例があちこちで報告されるようになった。あつしくんと同じように、自分の想いを話せない孤独な世界に暮らす全ての人たちが、心を解放して穏やかに暮らせる日がやがて訪れるのかもしれない。その日が来ることを信じて、私たちは筆談や様々な支援法にチャレンジしていこう。

グループホーム建設計画のご報告

多くのみなさまにご協力をいただきながら建設が始まらなかったグループホームですが、専門家の力を借りながらようやく農地転用に関わる開発の手続きが前進しました。福祉医療機構からの融資も決まり、来年の春には完成する流れになっています。本部機能も移転して、強度行動障害から高度な医療的ケアを必要とする方まで、地域での暮らしを可能にするホームのモデルになるに違いありません。

ご協力ありがとうございました。進捗状況はまた随時お伝えいたします。

認定NPO法人を目指して 重ねてご協力のお願い

今後事業が拡大していくにつれて、みなさまからご寄附をいただくこともあるかと思いますが、寄附してくださった方が少しでも税の優遇が受けられるよう、認定NPO法人を取得したいと思います。昨年からお願ひしておりますが、昨年度は、3千円の寄付を100人以上から受けるという条件を満たすことが出来ませんでした。ご協力いただけるかたは、同封の振込用紙を使って郵便局からお願ひします。振込用紙のない方は以下の口座からお願ひします。

郵便口座 藤本真二 00160-4-569771

